



ちょっと素敵な話

No.2

繋いだ手と消える笑顔

私は転職して福成会に来ました。

前にいた職場では嘱託契約の事務員をしていたのですが、特に事務仕事をしたかった訳でもなく、そこでアルバイトをしてお声がかかりました。当時就職活動にも疲れていた私は飛びついてしまったのです、あかん新卒でした。

当然、志の無い者が嘱託から職員に上げられるはずもなく、気の毒に思った（かどうかはわかりませんが…）前職の上司が福成会を紹介してくれました。

「君はやさしいから合っていると思うよ」と上司。

『なら、できるかも』と私。

このやりとりのお互いの無責任さは後々思い知ることになります。

で、云々色々（事務員の採用だと聞いて受けた面接が、実は支援員の採用だったと面接中に発覚したり…）ありまして、晴れて福成会の一員になりました。

またもやなんとなくいい加減に職を決めてしまったのでした。

こんな私が働き始めて先ずぶち当たったのが『障害への偏見』でした。お恥ずかしながら当時の私は（当時ですよ、当時）、利用者さんに対し

「私の言っていることが伝わるのだろうか？」

「私たちと同じ事柄で共感できるのだろうか？」

などと疑問に思いながら支援をしていました。

私の担当でお一人、皆と同じ部屋で作業活動をされず、隣の部屋でひとりきりで過ごす方がいらっしゃいました。そしてその方を皆のいる部屋に誘うのが私の日課でした。以前は部屋に入り皆と一緒に過ごしていたとの事です。

毎日毎日誘っても動いていただけず、

『話すら聞いてくれないんじゃないか？』

『いや、そもそも理解してもらえないんじゃない？』

連日続くと色々余計なことも考えてしまいます。

もともと微量だった自信すら消えて無くなりました。

そして一か月後、町に出てボウリングと昼食を食べて帰る、という行事の日が来ました。

私はその利用者さんとマンツーマンで行動を共にする役割です。

『うまくいくわけない！』心の中で叫びました…。

意外とスムーズにバスに乗れ、ボウリング場までたどり着きました。でも私は傍を歩いているだけ、意識もしていただけません。

ボウリング場でボールを渡し、ピンが倒れば「やったー！」と声を掛け、それでも私の存在には無関心の様子です。

まるで手ごたえがなかったのですが、ボウリングを終え、ボウリング場から出た瞬間、私は右手に重さを感じました。相変わらず私には興味の無いような顔をしながら、私の手をぎゅっと握って繋いでくれています。

事業所に着くまで、ずーっと繋いでくれました。むしろこの体制では手首が痛いのですが…と言いたくなる状況の時も繋いでくれました。

外出中、ずっと不安だったのだと思います。だからボウリング場で少しの時間一  
緒に過ごしただけで、私に対しての不信感が消えたのだと思います。

その時ふと気付きました。

しらーっと私の事など興味の無さそうな顔をしています、私の視線が外れると  
一瞬、ニカッと笑うのです。私が見直すと元に戻ります。

そして、もう一つ気付きました。

今まで、私は部屋に入れる事が目的で、その事自体が仕事だと思い、自分の職務  
を果たすためだけに話しかけ、誘う事を繰り返していたと、相手の事を考え、その  
人のために声を掛けていたのではないと…。

しかも伝わらないと思いがながら…。本当にお恥ずかしい話です。

あなたの事を信じたいけど信じられない、あなたはどんな人なの？

自分の都合を押し付ける人なの？

そう感じさせていたとしても不思議はありませんよね。

その日以来、私の誘いに応じてくれる事が少しづつ増えてきました。

私と目が合っている時にも笑ってくれるようになりました。

何より一緒にいると私が楽しいと思うようになりました。

利用者さんも私たちと同じだと思うようになりました。

この仕事が楽しいと思えました。

この仕事を続けたいと思えました。

今もこの仕事を続けていられるのは、私に仕事のやりがいを与えてくれたのは、あの日のあの離れない手と、視線を向けると消えてしまう笑顔のおかげです。

